



熊谷市長 小林 哲也氏

市長のメッセージ

熊谷市は、鉄道や幹線道路など優れた交通利便性を誇り、農業・商業・工業がバランスよく発展した住みやすい県北最大のまちで、2度の合併を経て来年度、熊谷市誕生20周年を迎えます。

今後も社会変革に適応したデジタル化による市民サービスの向上や地域経済の活性化に向けた取組を全力で進め、熊谷市の魅力である歴史や伝統、文化、スポーツに育まれたまちのポテンシャルを引き出して、全ての世代の人々が生き生きと活動できる、安全で住みやすい都市を持続できるように歩んでまいります。

はじめに

熊谷市は、人口約20万人、都心から50~70km圏に位置する県北最大の都市である。古くから交通の要衝として栄え、現在も、鉄道はJR上越・北陸新幹線、JR高崎線、秩父鉄道が通るほか、道路は国道17号・17号熊谷バイパスが市内を東西に、国道407号が南北に走り、市の中心部から国道125号・140号が分岐しているなど、優れた交通利便性を誇っている。

市の南部を荒川、北部を利根川が流れ、2つの大河により育まれた肥沃な土地と豊富な水に恵まれており、農業産出額で県内第7位、年間商品販売額で県内第5位、製造品出荷額で県内第2位と、農商工バランスのとれた埼玉県内有数の産業都市である。

熊谷の地名は、夏にニュースで「国内の最高気温を記録した」と報道されることが多いこと、2019年にラグビーワールドカップの会場となったことから、全国的に知られている。最近では冬の間、市中心部を流れる星川沿いで「星川イルミネーション」（表紙写真）が開催され、多くの人を訪れる。

★熊谷スマートシティとして進化中

現在、多くの都市や地域が、人口減少や高齢化、災害多発などの社会的課題に直面している。熊谷市はデジタル技術やデータを活用しながらまちづくりを進め、これらの課題解決を図ろうと、2023年7月に「熊谷スマートシティ宣言」を行った。

熊谷スマートシティの入り口はLINEアプリの「クマ

ぶら」だ。入り口が「クマぶら」に集約されることで、市民や来訪者が欲しい情報を簡単に得られるようになった。「クマぶら」上では地域電子マネー「クマPAY」やデジタルコミュニティポイントの「クマポ」も利用することができる。

「クマPAY」は市内の取扱加盟店での買い物に使えるキャッシュレス決済で、市民生活の利便性向上や、市内加盟店のみ利用可能とすることで地域経済の活性化などを目的としている。

「クマポ」はボランティアや地域活動等の参加者に、主催する団体等を通じて付与する譲渡可能なポイントで、「クマポ」の循環で人のつながりをつくり、共助やコミュニティ活動の活性化を図ることを目的としている。

昨年8月には、熊谷スマートシティをさらに進化させるため、市民参画、公民連携のプラットフォームとして「コミュニティラボ」を始めた。「市民共創、市民協働」、「産業、イノベーション」を2つの柱として、リアルの間とクラウドの場で、市、市民、事業者、学校などが連携



「コミュニティラボ」のコンセプトビジュアル

熊谷市概要

人口(2024年12月1日現在)	191,108人
世帯数(同上)	90,739世帯
平均年齢(2024年1月1日現在)	49.2歳
面積	159.82km ²
製造業事業所数(経済構造実態調査)	352所
製造品出荷額等(同上)	10,751.4億円
卸・小売業事業所数(経済センサス)	1,694店
商品販売額(同上)	6,792.5億円
公共下水道普及率	48.2%
舗装率	73.5%

資料:「令和5年埼玉県統計年鑑」ほか



主な交通機関

- JR上越・北陸新幹線 熊谷駅
JR高崎線 熊谷駅、籠原駅
秩父鉄道 熊谷駅、ソシオ流通センター駅、上熊谷駅、石原駅、ひろせ野鳥の森駅、大麻生駅
- 関越自動車道 花園IC、嵐山小川IC、東松山ICから市役所まで約16km

し、新たなコミュニティづくり、社会実験、ビジネス化を行って「夢が叶うまち」の実現を目指していく。

❁ 子育て支援・保健拠点施設の整備

熊谷市の行政施設の多くは昭和の時代に建設され、老朽化が進んできた。児童館や保育所など子育て支援施設、保健センターや休日・夜間急患診療所など保健医療関連施設は古いものは昭和40年代に建設されており、時代になかった施設に建て替えることが課題となっていた。検討の結果、これら子育て支援施設や保健医療関連施設を、市の遊休地1カ所に集約して建て替える計画が固まった。

保育所については、市内の4つの公立保育所を1つに集約することで、効率的な運営ができるという。保育所の集約により、熊谷駅を利用する鉄道通勤者の利便性を損なわないよう、熊谷駅でこどもの受け入れ・引き渡しを可能とする。新たに設置される(仮称)「こどもセンター」には中高生が学習やグループ活動を行う施設も充実させ、児童クラブも併



(仮称)「こどもセンター」と児童クラブの完成イメージ図

設される計画だ。

子育て支援施設や保健医療関連施設を1カ所に集約することにより、利用者の利便性が高まるほか、利用者が敷地内に滞留しやすい雰囲気を作ることにより、世代間の交流を活発化させることも狙っているという。

❁ 北部地域振興交流拠点の整備に向けた検討開始

熊谷市では市役所南側に長年コミュニティひろばとして利用されている土地があり、中心市街地の活性化を図る観点からも有効活用が課題であった。市役所の建物も老朽化したため、当該地での新庁舎建設も候補に挙がっていた。

埼玉県の熊谷地方庁舎も老朽化してきたなか、埼玉県の5か年計画(令和4年度~令和8年度)では、「北部地域振興交流拠点の検討推進」が盛り込まれた。

これを受け、当該コミュニティひろばの共同利用を図るべく、埼玉県は産業振興機能及び地域機能の集約、熊谷市は市役所の行政機能の移転をテーマに検討が始まった。2023年9月には県と市で構成する連絡調整会議も設置された。

北部地域振興交流拠点は、産業振興機能や県の地域機能、熊谷市の行政機能などが集約される予定で、DXを前提とした未来の埼玉県庁の先行モデルとしての役割も加わるという。

埼玉県と熊谷市の連携により、賑わいのある新たな施設が誕生するのが今から楽しみだ。(太田富雄)